

# 高校サッカー選手のゲーム直前の心理的コンディション — 中京フェスティバルでのPCI実施の結果報告 —

吉田竜彦\*, 猪俣公宏\*\*

Players' Mental Conditioning on before the Game of Youth Soccer  
— Results of PCI in Chukyo Festival —

Tatsuhiko YOSHIDA, Kimihiro INOMATA

## 1. 研究目的

心理的コンディションを客観的に測定するのは非常に難しいと考えられる。心理的コンディションの客観的測定の難しさはいくつかの理由があげられるが、まず心理的コンディションの概念や意味が曖昧であること、またこの領域における科学的研究の少なさなどがあげられる。一般的に、まず心理的コンディションは競技においては、トレーニング期に続く調整期の心理的状态を意味しているが、特に狭義の概念としては潜在的能力を最高度に発揮する為の心理的条件を指していると言えよう。猪俣によって開発されたPCI (Psychological Condition Inventory) は、心理的コンディションの概念を数量化してその構成要因を明らかにした上で標準化された質問紙である。しかし競技における心理的コンディションの概念は複雑であり、このような標準化された質問紙で明らかにできることは言うまでもなく限界がある。本研究においては、開発されたPCIの妥当性や心理的コンディションを客観的に測る上での限界について明らかにする目的で、サッカー競技を取り上げ、主として大会試合成績、競技レベル、ポジション、コンディションレベルなどの基準について基準関連妥当性を確かにするにことにした。また信頼性、妥当性の面でも問題点があり、また試合の数、露出度、練習の負荷値などの状況変数

の影響も検討せねばならない。そこで今回は予測的妥当性の検討しその事例として心理的コンディショニングの客観的測定を目的として作成されたPCIを用いて高校サッカーを対象に検証を行った。

## 2. 研究方法

- (1) 調査対象：1999. 7. 22～7. 25まで中京大学体育会サッカー部が主催し、県下9会場で開催された第15回中京サッカーフェスティバルに全国から希望し参加したチーム（大学チームは除く）47チームの高校生男子846名（大会規定の1試合の登録人数18名）。
- (2) 調査方法：前日の監督会議で質問紙を配付し、各チーム3日目の第1試合前（試合開始10前）にPCIを実施、その直後に会場担当者が各チームごとに回収した。
- (3) 分析方法：統計処理用ソフト SPSS9.0Jfor WindowsによりPCIフェイスシートに記載されたデータの各尺度の得点比率をポジション、大会順位、競技レベル、当日のコンディション別に分類し Kruskal Wallis 検定、Mann-Whitney 検定により分析した。
- (4) 分析内容：調査したPCIのスコアに基づく7つの尺度を元にポジション（GK、DF、MF、FW）、フェスティバルでの順位、選手個人の競技レベル、の身体的コンディションの項目

\*大学院生, \*\*教授

表1 ポジション別の比較

ポジション別(N)	一般的活気	SD	技術効力感	SD	闘志	SD	期待認知	SD	情緒的安定感	SD	競技失敗不安低	SD	疲労感低	SD
FW (142)	64	11	57	13	78	14	57	11	61	13	60	15	47	14
MF (287)	64	12	57	13	78	14	58	11	63	13	60	14	48	5
DF (252)	64	13	55	13	79	13	57	11	61	13	57	16	49	17
GK (81)	64	14	58	13	79	12	58	11	64	12	57	17	52	17

表2 大会順位別の比較

順位別(N)	一般的活気	SD	技術効力感	SD	闘志	SD	期待認知	SD	情緒的安定感	SD	競技失敗不安低	SD	疲労感低	SD
1位(93)	68	13	65	12	81	12	62	13	69	12	67	17	59	12
2位(93)	65	10	57	12	79	12	57	10	66	13	58	19	50	11
3位(103)	63	15	59	14	79	14	58	12	64	13	64	21	50	12
4位(88)	61	12	55	13	78	14	55	11	60	12	59	16	51	14
5位(76)	61	12	56	12	75	13	55	9	60	13	56	17	48	11
6位(111)	64	13	54	14	80	13	57	12	59	14	57	18	48	12

ごとに分け分析した。

(5) PCI 尺度について：この標準化された質問紙の下位尺度は以下の通り7つの尺度により構成されている。

1) 一般的活気

生活一般において、事に際して積極的に取りむ姿勢や精神状態を示す尺度。

2) 技術効力感

競技における自己の技術にする自信や状態を示す尺度。

3) 闘志

競技における闘志や競技意欲を示す尺度。

4) 期待認知

競技における周囲の人からの期待をどのくらい積極的に感じているかを示す。

5) 情緒的安感

生活一般における情緒の安定感に関する尺度。

6) 競技失敗不安

競技における失敗についての不安を示す尺度。

7) 疲労感

生活一般における心身の疲労感を示す尺度。

### 3. 結果と考察

(1) ポジションの比較

ポジション別に各尺度の平均値の値を比較した結果(表1)、7つの尺度のいずれの間にも有意差はなかった。しかしその中でも、DFとい

うどちらかという守備の選手の競技失敗不安尺度の値がFWというどちらかという攻撃の選手の比率よりも若干下回った。守備の方が、責任ある立場のため、失敗する不安が高いと考えられる。しかし、今回DF、FW間は検定結果から有意な差はみられなかった( $df = 3, p > .053$ )ものの、若干差は存在する傾向がみられた。また、技術効力感尺度にも有意差はないが( $df = 3, p > .042$ )同じ傾向がみられた。DFのボールを奪うというテクニックはFWの選手のテクニックに比べて易しいと考えられ、プレーとしての注目度の低さからも効力感を感じない傾向があると考えられる。

(2) 大会順位の比較

第15回中京サッカーフェスティバルでのA~Fの6グループの1位~6位の順位別に比較した結果(表2)、上位チームの方がよい心理的コンディションであった。特に技術効力感尺度( $df = 5, p < .001$ )、期待認知尺度( $df = 5, p < .001$ )、競技失敗不安尺度( $df = 5, p < .001$ )といったレベル尺度に有意差がみられた。試合10分前に調査したことからその時期における心理的要因が試合の結果を左右する一つの有力な要因になっていたものと考えられる。

(3) 競技レベルの比較

各尺度のを競技レベルに比較した結果(表3)、技術効力感尺度( $df = 5, p < .019$ )、期待認知

表3 競技レベルの比較

レベル別 (N)	一般的活気	SD	技術効力感	SD	闘志	SD	期待認知	SD	情緒的安定感	SD	競技失敗不安低	SD	疲労感低	SD
国際 (外) (34)	65	15	61	11	82	14	60	10	61	12	65	20	75	15
国際 (内) (7)	59	9	61.9	79	10	51	7	64	17	54	26	69	11	5
全国 (147)	64	12	61	14	80	12	60	12	65	13	63	20	76	12
地域 (154)	64	14	56	13	80	13	58	10	62	13	58	19	75	13
県 (258)	63	12	53	11	78	14	56	9	62	12	55	17	73	12
地区 (63)	64	13	55	14	79	12	56	12	59	14	60	18	76	14

表4 コンディション別の比較

コンディション別(N)	一般的活気	SD	技術効力感	SD	闘志	SD	期待認知	SD	情緒的安定感	SD	競技失敗不安低	SD	疲労感低	SD
C 1 (371)	65	12	57	13	79	14	58	11	63	13	60	18	76	13
C 2 (175)	65	12	56	12	80	12	58	9	61	13	59	18	73	13
C 3 (120)	60	10	54	13	76	12	55	12	59	13	54	19	72	13
C 4 (39)	56	14	51	15	75	12	52	12	59	12	52	21	68	15
C 5 (8)	55	22	62	13	69	14	50	11	62	12	50	16	67	11

尺度 ( $df = 5$   $p < .03$ ) などで有意な差がみられ、競技失敗不安尺度 ( $df = 5$   $p < .056$ ) である程度の差がある傾向が認められた。多重比較の結果、1) 競技レベルが高いほど競技失敗不安が低い。2) 競技レベルが高いほど技術効力感が高い。という結果が得られた。また国際ゲーム経験レベル (この場合、各年代の日本代表での経験と考えられる。) ( $N = 41$ ) と国内レベル ( $N = 622$ ) の選手の比較では、技術効力感尺度、競技失敗不安尺度で5%水準で有意差が認められた。しかし国際レベルの選手は国内レベルの選手よりも疲労感がやや高い傾向がみられた。代表での試合、各高校、クラブでの試合の多さと露出度の高さから疲労感を感じているものと推察される。

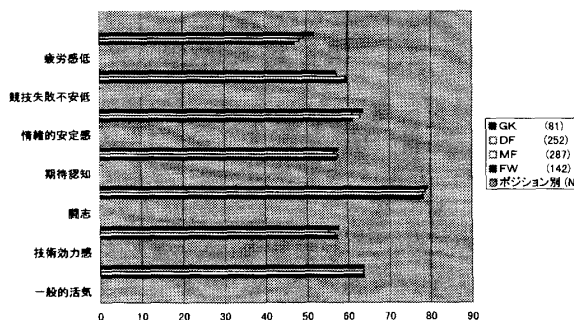
(4) コンディションの比較

ここでのコンディションは1~5階でベストコンディションであるほど1に近づき、最悪であるほど5に近づくというものである。そのコンディション別に比較した結果 (表4)、一般的活気尺度 ( $df = 4$   $p < .001$ )、闘志 ( $df = 4$   $p < .01$ )、情緒的安定感尺度 ( $df = 4$   $p < .01$ )、疲労感尺度 ( $df = 4$   $p < .001$ ) いずれも有意差がみられた。主観的コンディションが一般的活気尺度、情緒的安定感尺度、疲労感という尺度と特に密接な関係にあるものに影響を与えていると考えられる。またC4、C5のサンプル

数が極端に少なかった為、これを除いた3段階で比較した結果、1) コンディションが良いほど、一般的活気、技術効力感、期待認知、情緒的安定感が高い。2) コンディションが良いほど、競技失敗不安、疲労感は低い。さらにベストコンディションの選手と中位のコンディションの選手での比較では上記の尺度における差が有意 ( $p < .05$ ) である。

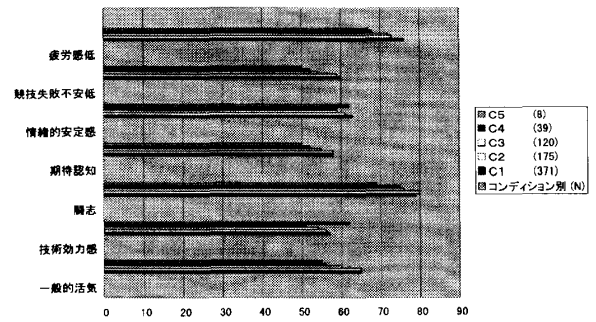
4. まとめ

- (1) 以上のような各関連基準における比較の結果、順位の上位と下位、競技レベルの高い低い、主観的コンディションの善し悪しでいずれも技術効力感尺度、競技失敗不安尺度に有意差がある、もしくはその傾向が強い。

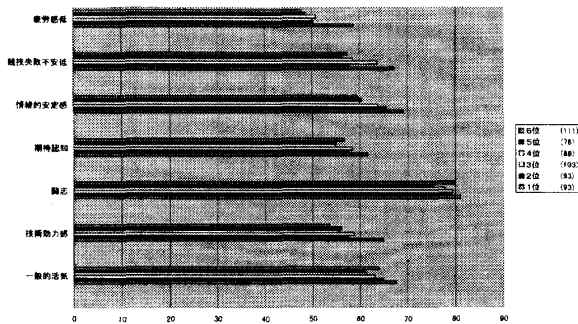


参考資料1 ポジション別の比較

(2) ベストコンディションの選手だけを抜き出して大会順位の1位と6位を比較した結果、闘志尺度 ( $p < .418 \rightarrow p < .402$ ) 期待認知尺度 ( $p < .003 \rightarrow p < .019$ )、情緒的安定感尺度 ( $p < .0 \rightarrow p < .019$ )、競技失敗不安尺度 ( $p < .0 \rightarrow p < .018$ )で差が減少していた。コンディションの善し悪しが試合結果に影響を与えていると考えられる。

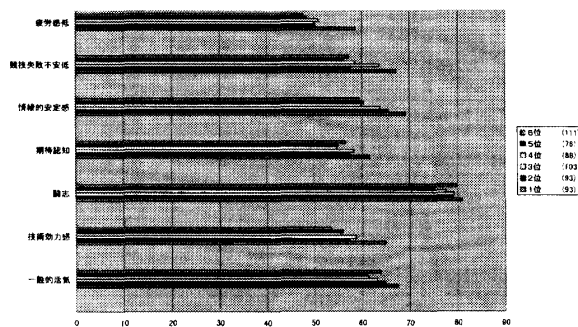


参考資料4 コンディション別の比較



参考資料2 大会順位別の比較

(3) 疲労感尺度がどの選手も他の6尺度に比べて低かった。この大会に対するトレーニングの方法、試合数の多さ、大会時期が原因として考えられる。



参考資料3 競技レベル別の比較

(4) コンディションの調査に関してはあくまで本人の主観的評価であり、どのような背景や基準で判断したかをさらに調査していく必要があると考えられる。

(5) このPCIの実施だけでなく、ゲーム、トレーニングを通じた行動分析、長期的な計画を持ってPCIを実施していくこと、コーチからの評価等指標を増やしていく必要があり、またさらに結果として心理的コンディションが適切でない選手に対してどのように指導していくかなど今後、さらに心理的コンディションの最適な測定法や診断方法、指導法について検討を加えていくことが重要である。

謝辞

本調査実施にあたり中京サッカーフェスティバルに参加していただいた各チーム監督様ならびに選手各位、中京大学体育会サッカー部スタッフ各位、中京大学体育学研究科修士1年佐藤敬広、村井剛、中京大学体育学研究科研究生川田剛宏、内田貴子氏に協力を得た。記して謝意を表す。

参考文献

- 1) 猪俣公宏：競技における心理的コンディション診断テストの標準化 1996
- 2) 猪俣公宏、山本勝昭：コンディション・チェックのためのテスト基準の作成ーPCT (Psychological Condition Test)平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No,

IX オーバートレーニングに関する研究－第  
2 報－, 97-107, 1991.